大学院生　卒業エッセイ

このたびは

第 9 期大学院生　菊盛 真衣
（第 7 期 OG）

大学院に入学した当時驚いたことの 1 つに，「師弟関係」があります。学会等で初めてご挨拶をさせていただく先生から「師匠はどなたですか？」とか「誰先生のお弟子さんですか？」と質問されたとき，あるいは，小野先生から「〇〇先生は，△△先生の門下だよ」と聞いたとき，軽い衝撃を受けたのを今でも覚えています。指導教授を師匠，その指導下の学生を弟子，同じ指導教授を持つ弟子同士を同門と呼称する慣習は，歌舞伎や落語のような芸事の世界を彷彿させ，学問の世界もまた伝統的な世界であるということを肌で感じました。さらに驚いたのは，「師弟の縁は続くよ，どこまでも」です。師弟は三世（師弟の縁は前世・現世・来世の 3 世につながる深い因縁で結ばれている）という言葉もあるように，弟子である私が大学院を卒業し，大学教員としてやっていくことになっても，師弟の間柄は師匠か弟子のどちらかが先に死ぬまで（いわゆる，死が二人を分かつまで）続くようです。当時はそこまで考えが至っていなかったので，そのことに気付いたときには，師弟関係のあまりの深遠さに思わず息を呑みました。当然ながら師匠だけでなく，同門の先輩・同輩・後輩とも同じように長きに亘って縁は続いていきます。大学院に入学したことで，血のつながりのない師匠や同門の人たちと，家族や兄弟と同じあるいはそれ以上の深い間柄になるというのだから，たいそう驚きました。

大学院生活での驚きには，他にもコネクティング･ドッツ経験があります。スティーブ･ジョブズの話を持ってくるなんて，意識高っ！ と思われそうで嫌なのですが，仕方ないですね。端的に言うには便利な言葉です（言いやすさ重視で「ザ」は省きました）。コネクティング･ドッツ経験というのは，読んで字の如く点と点が線になる経験です。過去に打った小さな点や打ったことすら忘れた点が，思いも寄らぬきっかけによって突然繋がる瞬間をこれまで幾度も経験してきました。例えば，数年前にあ

マーケティングのレジェンドこと Belk 先生＆Ingene 先生と共に
SMA2015@テキサス（著者は右端）

る国際学会で発表するために短めの英語の論文を投稿しましたが，結果は不合格となり，その論文はお蔵入りしました。それが，最近になって別の国際学会への投稿を決心したときに大いに役立ちました。投稿を決心したのは，締切の数時間前で，投稿論文には，かなり短めのページ制限がありました。どの論文を投稿しようと思案したとき，お蔵入りの論文の存在をはっと思い出し，確認すると分量もピッタリ。何とか締切にも間に合うというビックリ仰天な経験をしました（まだ合否結果は出ていないのですが)。こういった類の経験は，挙げれば枚挙に暇がありません。博士課程に進学し，学年が上がるにつれて，点と点がつながり，そこから新しい研究のアイデアが生まれたり，研究発表や出版物への寄稿に結びついたり，はたまた寄稿した論文が表彰されるという有難いサプライズ経験もありました。

しかしながら，点と点がつながり良い結果がもたらされるということはさほど重要ではありません。重要なのは，結果が良かろうと悪かろうと，とにかく点を打ちまくることだと思っています。結果は悪かったとしても，ひとまず打った点が，その時には予測不可能な「まさか，ここで？！」なタイミングで別の点と結びついたりするわけで，好機は一体いつ，どこで巡ってくるかわかりません。常に準備万端な姿勢でそうした機会を迎えられるとは限りません。それでも，とりあえずやってみましょ！ と腰を上げ，頭を使うなり，手を動かすなりしてみるわけです。こうして，大学院時代は，常に挑戦，全てにトライな心構えで，点を打ちまくってきました。当然挑戦すればするほど，失敗してつまずくことも増えますが，心折れずにトライあるのみでしょう。ドッティングし続ければ自然にコネクティッドされると信じているので。

さて，今回のタイトルは，「このたびは 幣(ぬさ)も取りあへず 手向山(たむけ) 紅葉(もみぢ)の錦 神のまにまに」という百人一首の和歌から持ってきました。歌ったのは菅家，学問の神様である菅原道真です。「今度の旅は急なことで，旅の安全を願って道の神に捧げるお供え物を用意できておりませんが，この手向山の錦織のように美しい紅葉を捧げ物として，どうか神の御心のままにお受け取りください」といった意味になるそうです。来年度の進路についてまだはっきりと決まったわけではないのですが，大学院およびこのゼミを突然巣立つことになるかもしれません。そうした急な巣立ちになったときには，紅葉の錦と言えるほど華やかで美しいものではけれど，これまでの 5 年間の挑戦の積み重ねを捧げ物として，学問の世界の神様の御心のままにお受け取りください，そして，これからの研究者人生を無事に歩んでいけるようお守りくださいという今の気持ちを込めてみました。学問の神様だけはなく，もちろん，師匠や同門の人たちにも同じようなお願いの気持ちを抱きながら，次の挑戦を見据えている次第です。

著者の挑戦を常に応援してくれる 7 期澤井さんの結婚式にて（著者は後列左端）